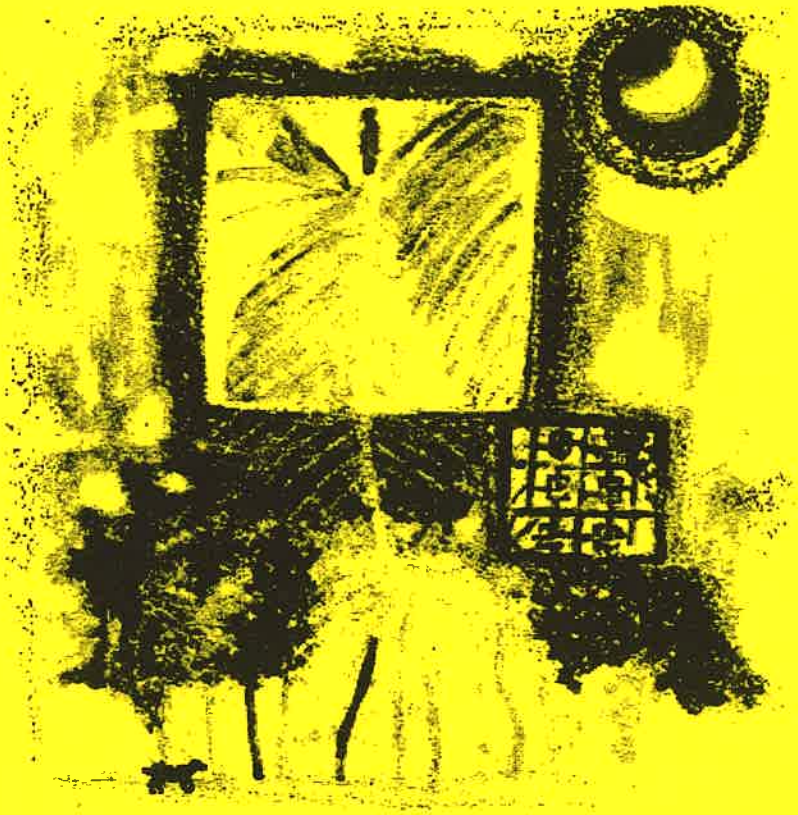
第29回

ACEF
STUDY TOUR



バングラデシュ寺子屋訪問

2005年8月5日（金）～19日（金）

第29回
バングラデシュスタディーツアー報告書
目次

ツアースケジュール

ACEF と SEP（現 BDP）について

メンバー紹介

スタッフ紹介

地域紹介
ダッカ
ネトロコナ
カティラ

ベンガル用語の基礎知識

ベンガルフード

アンケート

みんなの感想文

参加者名簿

ツアースケジュール概要　2005年8月5日～19日

5　日 （金）	AM9：00　成田国際空港集合 定刻より２時間遅れビーマンバングラデシュ航空 73 便にて出発。 同日夜ダッカ空港到着		ダッカ市内（YWCA泊）
6　日 （土）	AM　BDPスタッフによるオリエンテーション ニューマーケットで買い物 PM　博物館見学 夜　シャプラニール中森さん「バングラデシュのストリートチルドレンについて」		
7　日 （日）	AM　A・Bに分かれて学校訪問 PM　YWCA近くのお店で買い物 日曜礼拝参加		
8　日 （月）	朝食後、ネトロコナ、カティラに向けて出発		
	Aチーム（ネトロコナ）	Bチーム（カティラ）	
9　日 （火）	AM　学校訪問	AM　学校訪問	
10　日 （水）	AM　学校訪問	AM　学校訪問 PM　サリー	
11　日 （木）	AM　学校訪問 PM　市場見学	AM　学校訪問	
12　日 （金）	AM　ボート・トリップ PM　漁村訪問	AM　学校訪問 PM　ヒンズー教寺院へ	
13　日 （土）	AM　学校訪問 PM　先生方との交流	AM　学校訪問 PM　Cultural　program	
14　日 （日）	15日がストのため１日早くプーバイル入り PM　Aチーム、Bチーム合流		プーバイル泊
15　日 （月）	AM　学校訪問 夜　高校生、大学生グループに分かれてシェアリング		
16　日 （火）	AM　職業訓練学校およびcollege訪問 PM　ダッカ、プーバイルのスタッフと交流		
１７日 （水）	AM　学校訪問 PM　Cultural　program		
18　日 （木）	AM　Wrap　Up　Discussion PM　閉会礼拝 ダッカ空港に向けて出発		機内泊
19　日 （金）	帰国		

ＡＣＥＦとＳＥＰ（現ＢＤＰ）について

丹羽輝子

ＡＣＥＦ（アジアキリスト教教育基金・事務局長船戸良隆氏）は、１９９０年１０月ダッカ郊外で幼児初等教育に取り組んでいる、キリスト教系ＮＧＯ（民間公益団体）サンフラワー教育計画（ＳＥＰ→現ＢＤＰ）責任者ミナ・マラカール女史からの呼びかけに応えて設立されました。(「バングラデシュに寺子屋を贈ろう」～祈りと労働をもって～という標語のもとに)

両団体の目的とは、

（１）　軽視されがちな女子に対する教育に、生活指導を含めた「読み、書き、計算」などの基礎知識を教えながら、農村などの、そのままでは小学校にも行かない子どもたちに、小学校に行く心の準備をさせると同時に、集ってくる母親にも生活改善、保健衛生、識字教育を行う。当時のバングラデシュの識字率は約３０％（主に男子）。女子は口減らしのために、１４～15才で嫁がされ、それは人口増加の一因にもなっている。

（２）　日本においては、「開発途上国の諸問題」に積極的に取り組む青年を育成することで、特にキリスト者として自己の立脚点を明確にし、信仰の目を持って、アジアの諸問題を洞察し、主より与えられた使命感をもってアジアに仕え、また日本のキリスト教教育界、日本の社会に仕える人材を育成する。

Ｄｒ．ミナ・マラカール女史は、１９８８年退職を機に、船戸氏と、バングラデシュでの子どもたちの教育計画について話し合われ、「サンフラワー教育計画」（ＳＥＰ）を創設し、それを支える活動としてＡＣＥＦ（アジアキリスト教教育基金）の活動も開始されました。

ミナ・マラカール女史は、ボリシャール県カティラ村の出身で、キリスト者の両親の下で、キリスト者として育てられ、多くの困難の中で女性第一号の女医として、医師であられた御主人と共に地域医療に励まれ、特に予防医学の組織（ＣＨＣＰ）作りに参加されました。

その後、農村の人々の困難な現状の改善には、特に女性と子どもが基礎的教育の恩恵を受けられるようにする事以外に根本的解決策はないと考え、その活動に晩年のすべてを捧げられた。

「私は自分の人生を振り返ってみると、それは格闘の連続だったと思います。イスラム教国においてキリスト者である事、女性である事の困難に対してです。貧困にも立ち向かいました。しかし私はよき夫と子どもたち、両親と兄弟姉妹、友人らに支えられてきました。神様は私に様々な方法で、必要なときに必要なものを与え、御手をもって助け導いて下さいました。私の心は今感謝の気持ちで一杯です。」～ミナ・マラカール（１９９５年６月１５日第９回ＡＣＥＦセミナー講演「私の歩んだ道」から）

☆メンバー紹介☆

Ａチーム・ネトロコナ

左から

天野海走
（カイソウさん
・カイちゃん）
実は英語が堪能との噂。牧師なのに賛美歌をいつも間違って歌っていたそうな。。。

北村表現
（ヒョウゲン
・ドスト）
９９％ベンガル人！髪型までベンガルスタイルになってました。

山口旬
（やまじゅん）
お金のかかる趣味の持ち主。歌が大好きでバングラでは毎晩リサイタルをしていました！

高島奈央香
（ナオ・うりぼう）
子どもが大好き！泣いている子がいたらもう居ても立ってもいられません。考えるよりもまず行動！

尾崎かなえ
（かなえちゃん
・えっちゃん）
少食で周囲を心配させながらもルティーは大好きで毎朝お代わりしていました♪

中村恵子
（けいこちゃん）
ニキルさん大大大好き！！！お別れのときは号泣。ネトロコナでは大きな魚を釣り上げた！

岡本千恵
（ちえちゃん）
前日までＳＴが中止になると思っていました。ツアー中でつけた日記は合計なんと３冊！！

福島倫子
（ともこ・もこ）
ニキルに会いたいなっ♪を恵子と共に連発。虫が大嫌いでギャーギャー騒いでいました。

井上儀子
（のりこさん）
今回はＫさんにお株（ギャグ）を奪われていました。残念！バングラについた瞬間から水を得た魚のように生き生きしていました。

船戸良隆
（船戸先生）
江戸っ子（いい意味でも悪い意味でも）！

Ｂチーム・カティラ

上段

Carol Braaksma
（キャロル）
実は意外とおちゃめ！カティラにてボートで学校訪問中、オシムさんと大はしゃぎ。

中段左から

野坂郁佳
（ふみか・ふみちゃん）
平成生まれのパワーを発揮していました。よく笑い、よく驚き、よく泣き、よく踊る２週間でした。

丹羽輝子
（丹羽先生）
BDP のスタッフを含め、みんなのお母さん的存在。薬屋さんでもありました。今回でなんと４回目の参加！羨ましい…。

長尾有起
（ゆきちゃん）
まさにジョイフルな性格。声高らかに笑う笑顔は人を元気にさせる力を持っている。でも、ちょっと元気すぎ…？

入野恵子
（けいちゃん・ケコ）
カティラでは毎朝子どもたちから“ケーコ・コール”が。船○先生からのラブコールは一刀両断にしてたけどね～。

戸松優
（ゆーちゃん
・とまっちゃん）
Good Eater！絵もとっても上手です。ツアー中、とても沢山のことを感じ、考えていました。将来が楽しみ！！

下段左から

菅野幸恵
（ゆきえさん）
みんなのお姉さん。（山旬とかを含め！）cool beauty、そして B チームのブレインでもありました。

工藤千明
（ちあきちゃん）
睡眠時間を削ってまで子どもたちと遊んでいました。責任感も強くてしっかりもの。高校生とは思えない働き振りでした。

小倉沙央里
（さおりちゃん・サオ）
“カティラシック”で熱を出すくらい、カティラを愛していました。本気で居残ろうとしていたよねぇ…？

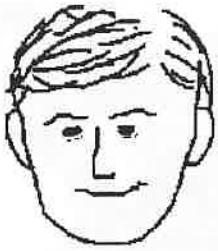
Q1，バングラデシュとはどういう意味？

①ベンガルタイガーのいる国　②ベンガル語を話す人たちの国　③ベンガル川の流れる国

♪BDP スタッフ紹介Ⅰ♪

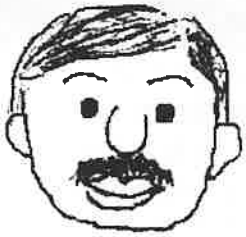
ダッカ スタッフ

アルバートさん
BDP の総責任者。切れ者だけどユーモアもすごくあります。ギターを弾く姿もステキ！



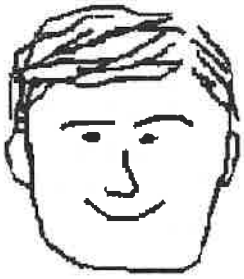
アンブロスさん
私たちの話をいつも熱心に聞いてくれました。カティラに行く途中は車の天井に頭をぶつけそうでした　　…　　。

ステファンさん
いつもバングラの政治や経済について熱く語るまじめな方でした。



ファルークさん
まじめでやさしくてひげの似合うファルークさん。でも恋愛の話も好きだったりします！

ソンチョイさん
BDP の大蔵大臣。彼の住む村にはみんなで行きました。とてもハンサムです♪



ニキルさん
ファンクラブができるくらい人気者でした。やさし～い笑顔にみんな？メロメロ！

ヘモントさん
歌がめちゃめちゃうまい！声がすごく素敵です。子どもとの接し方も上手でした。

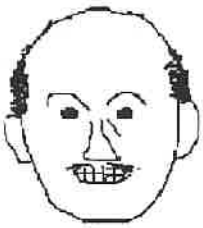
オシムさん
どんなに狭い道でもスピードを落とさない、いつも自信に満ち溢れるハンドルさばきでした。

Q1 答え

②ベンガル語を話す人たちの国。バングラ「ディッシュ」ではありません。

♪BDP スタッフ紹介 II♪

シャゴールさん
“ココ太郎”のトランスをとっても上手にしてくださって、子どもたちはもう劇に夢中でした！



ビプルさん
「オハヨウゴザイマス、ワタシノオバアサン」と沙央里ちゃんに挨拶していました。

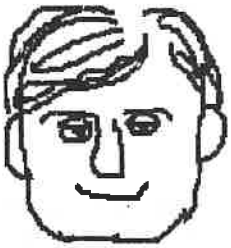
※作画者からのコメント
いちいち似てなくてごめんなさい…。これが私の限界です！血を吐く思いで描いたので、許してちょーだい！あぁ、そこ！「こんなのニキルさんじゃない！」とか言わないで～～

カティラスタッフ

ダニエルさん
ヒンドゥー寺院でのダンスが忘れられません。実は 17 才で結婚なさったそうです！

ジョセフさん
カティラスタッフ一のいたずら好き。ボートの上から 3 回も落とされていました。

ネトロコナスタッフ



ハビブさん
ちょっと強面ですが、根は優しい。シャイな一面も…。

マムーンさん
暇があるとチャーを出してきてくれる可愛い方です。あっちむいてほいも一緒にやりました。

Q2．バングラデシュの人口は？

①５０００万人　②一億人　③１億３０００万人

ダッカで過ごした3日間

８月５日から７日まではダッカ市内で過ごした。最近のスタディ・ツアーでは空港からすぐにプーバイルに移動していたらしいのだが、ダッカに滞在したからこそ見えてくるものもあるだろうということで、今回はダッカに３日ほど滞在する。宿泊先はYWCAの宿舎で、ホテル並みの快適さ。井戸で水浴びを覚悟（楽しみに）していた私たちには。こんなにいいところに泊まるのはスタディ・ツアー始まって以来（のりこさん曰く）とのこと。

8/6

儀子さんによる開会礼拝

“感謝すること”、”知る“だけではなく“感じる”スタディ・ツアーにしてほしいというお話しがあった。のりこさんのこの礼拝はこれからバングラデシュで２週間を過ごす私たちに大きな影響を与えたと思う。

BDPスタッフによるオリエンテーション

まず、アルバートさんからBDPの歴史、現状について説明をしていただき、その後ヘモントさん、スティーファンさんから学校、職業訓練学校の詳細について説明があった。

オリエンテーション後、ニューマーケットへ買い物に出かける。４グループに分かれて買い物。BDPのスタッフや先生方がそれぞれのグループに付き合ってくださる。女性は全員サロワカミューズを購入。

昼食後、博物館見学へ

博物館は本当にたくさんの展示物があり、最後にある独立戦争のコーナーにたどり着くまでには足も目も疲れてしまう。それでも独立戦争に関する写真や展示物は見ごたえがあり、戦争の生々しさが伝わってくる。

Q2 答え

③１億３０００万人。日本と同じ位の人が北海道２個分くらいの土地に住んでいます。

夕食後、バングラデシュで活動する“シャプラニール”の中森さん、さんから「バングラデシュのストリートチルドレン」の話を伺う。
バングラデシュには発表されている統計によると43万人のストリートチルドレンがおり、うち33万人はダッカにいる。中森さんからはストリートチルドレンとはどんな子どものことをいうのか、なぜストリートチルドレンになってしまうのか、シャプラニールではどんな支援活動をしているのかについてかなり具体的にお話していただいた。メンバーから例えば物売りの子どもたちにどういう風に対応したらいいのかという質問があったが、中森さんの答えは明快で、必要がなかったら「NO」という意思表示をはっきりすればいいし、売っているものが欲しかったら買うということだった。変な構えをもたずに接すればいいということだろうか。
その日のシェアリングでは、日中買い物の行き帰りにストリートチルドレンらしき子どもたちをみかけていた人も多く、中森さんのお話をうけてその話題を話す人が多かった。

8/7
朝拝　丹羽先生

Aチーム Bチームに分かれてダッカ市内の2つの学校を交代で訪問。
マニプール第二学校では、子どもたちがバングラデシュと日本の旗で歓迎してくれた。
スラム街にある学校を訪問。このスラムは墓地の周辺にあり、BチームはBDPスクールの生徒の家を訪問させていただいた。部屋は1室で、ベッドと家族4人が暮らしている。父親は失業中で、母親の稼ぎで暮らしている。

昼食後、宿舎近くの店「アーロン」に買い物に出かけ、日本へのお土産などを購入。

夕方、近くの教会での礼拝に参加する。

夕食後のシェアリング。
スラム街を訪れて感じたことを語る人が多かった。共通していたのは、スラムの子どもたちの目も他の子どもと同じように輝いており、笑顔がとっても素敵だったということ。また何人かが、午前中にスラム街に行き、午後は買い物をたくさんしたことのギャップ、「買い物袋をぶら下げて物乞いの人の前を通るのがこころ苦しかった」と話していた。この後ゆきちゃんから「日本で買い物をしてホームレスの前を通るときにはこころ苦しさを感じているだろうか」という問いかけがあり、そのことについて少し議論になった。

Q3，バングラデシュで信じられている宗教は？

①キリスト教　②イスラム教　③ヒンズー教

ネトロコナでの生活（Aチーム）

8月8日　午前　　ダッカを9時ごろ出発。スタッフの方が途中下車し、果物を買いに行って下さいました。私たちはその間車を降りて休憩をしていると、表現が街の人に手招きされ、旬さん、海ちゃんも一緒に、ベンガルティーをいただいていました。そして、スタッフの方が買って来て下さったバナナを食べつつ再出発！

午後　　午後 3 時頃ネトロコナに到着しました。昼食後、去年まで使用していたＢＤＰを訪問しました。竜巻の被害を受けたそうです。その後、村長さんの家を訪問しましたが、村長さんも村長さんの奥さんもお留守でした。そして、近くの民家で辛いポン菓子と、ベンガルティーをいただきました。

8月9日　午前　　ネトロコナに来て初めてのラジオ体操。外は雨でした。朝食にジャックフルーツがでました。種が木の木目の様で綺麗だったので食後に洗って取って置く事にしました。(夜には白くなっていました。) その後、力車に乗って、途中からは畦道を歩いて学校を訪問しました。校舎内にいると外から沢山の村人が顔を覗かせて来て校舎が壊れそうになったので、校舎から外に出て自己紹介をしたり歌を歌ったりしました。

午後　　お茶の時間の後、近くの家を訪問しました。その家の方々がココナッツジュースをご馳走して下さいました。そこにはあまり飛ぶことが出来ないけれど、言葉をオウムのように話すことが出来る黒い鳥がいました。

Q3 答え

全部。ただしそのうちの８５％がムスリムです。

8月10日　午前　ボートで河を渡って学校訪問しました。校舎の外の広場で、子供たちとシャボン玉や、バレーボールをして遊びました。その後みんなで輪になってマイムマイムを踊ったり、なおちゃんがソーラン節を踊ったり、山旬と海ちゃんがアブラハムの子を踊ったりしました。村の子がとても綺麗な声で歌を歌ってくれました。帰りは先に乗る人と後で乗る人の二グループに分かれて手漕ぎのボートに乗りました。その後、二校目を訪問しました。教室に入ると子供たちが沢山のお花をくれました。教室は一つしかなく、みんなで一つの教室に入り一列に並んで歌を歌いました。

午後　みんなでマーケットに行く予定でしたが結局行きませんでした。行きたい人だけスタッフの方とやしの実を買いに出かけましたが、途中でもう売り切れたという情報を聞き、引き返すことになりました。道端であひるの大群に会いました。夜、大きなかぶの練習をしました。かぶ代わりにしていた白い風船が途中で割れてしまいました。

8月11日　午前　力車で学校を訪問していたら急にバケツをひっくり返したような雨が降ってきました。校舎は縦長で広々としていたので、大きなかぶを披露しました。風船は始まってすぐに割れてしまったので、表現の白い手提げを代用しました。大雨がなかなか止まず、その間校舎の中で村の子と私たちと交代交代で出し物をしました。ずっとそこで雨宿りをしていたので、時間が無くなり、二校目に行かずに帰る事になってしまいました。

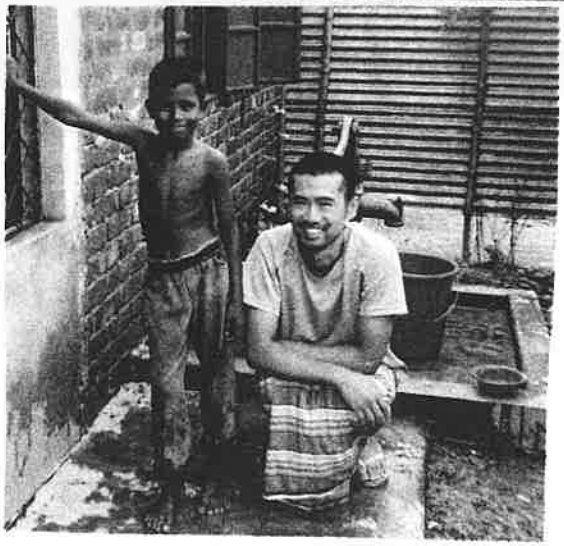
Q4，バングラデシュのお金の単位は？

①ルピア　②タカ　③チャット

午後　釣りをしたり、市場に行ったりして過ごしました。山旬は折角買ったルンギを市場に置いて来てしまいました。夜、希望者だけソーラン節の練習をしました。その後外に出て流れ星を見ました。

8月12日　午前　ボートトリップをしました。チャーを飲んだりビスケットを食べたり、歌を歌ったり、ソーラン節を踊ったりしました。岸について、なおちゃんとスタッフの方がオイルを買いに行っている間、ボートでは、集まってきた人たちのために、のりこさんが手品を、山旬、海ちゃん、表現がけん玉を披露しました。雨が降ってきたので、帰りはボートの中に座りました。

午後　スタッフの方が、池で網を使って夕食用の魚を獲って下さいました。子供たちも手伝ってくれて大賑わいでした。ティータイムの後、漁村へ行きました。夕方、なかちゃんたちのリコーダーに合わせてベンチ組が歌っていました。夜のシェアリングの時、こけらが登場しました。今日はみんなでソーラン節の練習をしました。「今日の日はさよなら」も練習しました。（この時なかちゃんともこちゃんはスタッフのところへ行っていました。）



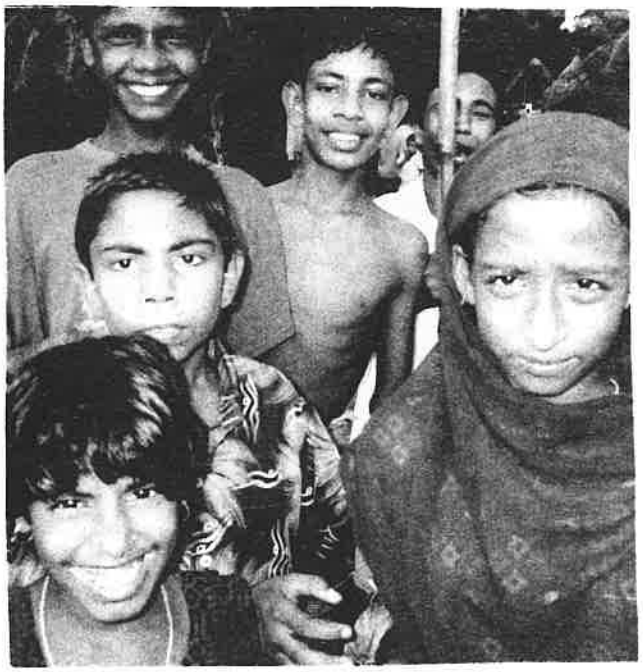
Q4答え

②5カ。1タカは約2円。

8月13日　午前　　朝食に牛の肉が出ました。この日は歩いて学校訪問しました。晴れてきたので暑かったです。着いたらすぐに井戸で足を洗い、二教室あったので二グループに分かれて入りました。その後外で合流し、ソーラン節を踊りました。最後のポーズはうりぼうがリードしてくれました。「今日の日はさよなら」を歌ってスタッフの方が用意して下さった車に乗り込み次の学校へ行きました。さすがにはしゃぎすぎたのか、ここで数人がダウンしてしまいました。ソーラン節を死にそうになりながら披露して、へとへとになって帰りました。

午後　　午後四時頃に村の人がサリーを持って来て下さいました。結婚式などで使うような上等なサリーでしたが、私たちに着せて下さいました。メンディもして下さいました。とても感激しました。その方たちをお見送りした後、村の男の子たちが、棒を持った格闘技みたいなスポーツをやってくれました。とても迫力がありました。旬さんと海ちゃん以外ですが、ノヨンの家にも行きました。小川を渡るのに一苦労しました。夜のシェアリングの後、ドンノバットソングの練習をしました。

8月14日　午前　　朝食時からみんな涙、涙でした。車に乗る前にみんなで輪になってドンノバットソングを歌いました。名残惜しかったけれども、現地の人に別れを告げて、朝早くに出発しました。途中で教会により、牧師さんの話を聞き、礼拝をしてプーバイルに向かいました。



Q5．バングラデシュはどこの国から独立したでしょう？

①ビルマ　②パキスタン　③インド

ベンガル用語の基礎知識

【あいさつ編】

アッサラーム-アライクム イスラム教徒のあいさつ。敬礼のポーズであいさつ。

オアライクム-アッサラーム アッサラーム・アライクムに対する返答。

ノモシカール イスラム教徒以外のあいさつ。

ケモナチェン お元気ですか。

バロアチ 元気です。この答えしか知らないので、具合が悪くてもバロアチ。

アバール-デカホベ また会いましょう。

ドンノバッド ありがとう。バングラデシュでは頻発すべし。

オネーク-ドンノバッド どうもありがとう。

タタ 子供の挨拶。バイバイの意か。手を振ってあいさつ。

【会話編】

アマール-ナム-〜 私の名前は〜です。

トマール-ナム-キー あなたの名前は？（子どもに対して）

エタ-キー これ何？

オタ-キー あれ何？

コト-タカ いくら？タカ＝お金。

ボエシュ-コト いくつ？（年齢）

オシュビダ 問題あり。「ーナイ」問題ない。大丈夫。

アミクシ I am happy.

ハシ-ダオ 笑って。

アショ おいで。

ブジ-ナ わかりません。

アチェ ある。あります。

コタエ どこ？

ディン ください。「パニー」水ください。

【基本単語編】

ボロ 大きい。

バロ よい。

チェレ 少年。「バロ-チェレ」良い子。

シュンドゥール 美しい。素晴らしい。

ナイ ない。否定。

チョット 小さい。少ない。

ボンドゥ 友達。

ドスト 親友。「ーさん」をつけると北村表現氏の愛称となる。

ゴロム 暑い。

ガン 歌。「ーガオ」歌をうたって。

チョビ 写真。チョビ責めに注意。

タラタラ 急いで。

ダリ あごひげ。 **モス** 口ひげ

パンカ うちわ。

バリ 家。

ハリケーン ランプ。停電時の必需品。

ガリ 車。

フル 花。子どもたちからたくさんプレゼントされる。

【生き物編】

ククル 犬。

ゴル 牛。バングラデシュ農村の牛は小さい。

サゴール 山羊。山羊も小さい。

パキ 小鳥。

ビラール 猫。

バーク トラ。トラといえばベンガルタイガー。

ハッティー ゾウ。

イドゥル ねずみ。

コルゴーシュ ウサギ。

バン かえる。釣り竿で叩いて追い払う。

ガス 木。「コラ-ガス」バナナの木。

【食事編】

モジャ おいしい。「クブー」すごくおいしい。

パニ 水。生水注意！

チニ 砂糖。

ヌン 塩。塩の補給を忘れずに。

チャー 紅茶。ミルクティーとジンジャーティーが定番。

マース さかな。魚のカレーも旨い。

カチャモリス 青唐辛子。注意！

コラ バナナ。用例「ーうめーや」

アールナ もう結構です。これを言わないと、わんこそば状態に。

フル-フル ベンガル語ではないが、お腹がいっぱいであることを表わす。ベンガル人は言葉を2回繰り返すのが好き。

数字

1	・・・エク
2	・・・ドゥイ
3	・・・ティン
4	・・・チャイ
5	・・・パス
6	・・・チョイ
7	・・シャット
8	・・・アット
9	・・・ノイ
10	・・・ドス
11	・・・エガロ
12	・・・バロ

※〜タをつけると〜時になる。エクタ＝1時

Q7 答え

③ノクシカタ。モチーフによってそれぞれ意味が違います！

右手でいただきます!!

バングラデシュで食べたもの

☆ カレー

（チキン、ビーフ、鯨、海老、人参、カボチャ、ジャガイモ、ナス等々。。。）
毎日カレー！というとげんなりするかもしれませんが、大抵の日本食がおしょうゆ味だったりお味噌味だったりするのと同じで、野菜炒め「カレー味」とか牛肉煮込み「カレー味」といった感じで飽きることはありません。

☆ ダルスープ

ダルという小さい豆のスープ。ご飯にかけて食べます。もちろんカレー味！

☆ 青唐辛子・レモン・塩

食欲がないときにはこれらの調味料（？）をひとふり。たくさんたくさん食べられるようになりますよ。

☆ フルーツ

バナナ（ベンガル語でコラ）、マンゴー（濃厚！）、パイナップル（甘～い）、りんご（・・・。）、グアバ（慣れればおいしい？）、ジャックフルーツ（緑色の大きい果物。栄養満点！）ジャンブラー（グレープフルーツのような柑橘類。）などなど。

☆ 椰子の実のペースト

見かけはカレーなのに食べてみたら超甘い！

☆ ルティー

ナンの親戚のような、無発酵のパン。朝ごはん。ジャガイモのカレーを包んで食べるのが普通ですが、バナナを巻いてクレープ状にしたり、チャーに浸して食べたりもします。ちなみに最近は普通のパンを食べる人も増えてきたそうです。

☆ チャー

これがなければバングラ生活は送れない！ちょっと一休み、のときに必ず飲む、いわゆる紅茶、ベンガルティーです。砂糖とコンデンスミルク、両方入れましょう！お好みでカルダモンとシナモンを入れても。

Q8. 女性の着る民族衣装は？

①サリー　②メリー　③ドリー

みんなの感想文

Q8 答え

①サリー。その他に「サロワ・カミューズ」という民族衣装もあります。

「独立」の重み

山口　旬

私にとっては３年ぶり２回目のスタディツアー参加でした。一昨年はＳＡＲＳで中止、昨年は出発３日前になっての洪水による中止とここ数年夏のツアーはことごとく大きな壁に阻まれてまいりました。３度目の正直となる今回のツアー、出発するまではまたいつ中止の知らせがあるかしらんと内心そわそわしておりました。

今回は準備会のときに「予定していた人が来られなくなったのでバングラの歴史についての勉強会を担当せよ」との事務局からの指令。前の準備会で聞いた程度にしか理解していなかったバングラデシュの歴史を一夜漬けで頭に詰め込み、しょうもないクイズでお茶を濁しながら時間を稼ぎましたが、まあもともと歴史は大好きで小学校の授業でも６年生の歴史の授業が一番得意な人間です。知れば知るほど伝えたいことは際限なく広がります。なかでもとりわけ学生さんたちに知っておいてもらいたかったのは、私たち日本人が知りうることのできぬ「独立」の重み、それにともなう犠牲と誇り、愛国の心、これらは目には見えねどもバングラの人たちと接する上でその根本にあるものだからです。寺子屋を訪問して子供たちの踊りや詩の朗読を聞いても現地のスタッフと会話をしてても、彼らの心の奥底にあるのは国への誇りと愛国の心です。前回のツアーで子供たちと交流したときに、いかに自分の国を表現することが困難かを思い知りました。詩の朗読、「日本の歌」ひとつみんなで即座に暗唱することができない。「じゃあ国歌を歌って」といわれて誇りを持って歌うことができるか。今回もカレッジを訪ねたときに「国の花はなんだ」「鳥は」「歌は」「代表する詩を言ってくれ」と矢継ぎ早に根掘り葉掘り聞いてくる。本当に知りたいのかどうかはともかく会話の中心が「日本という国」であったことは事実。その日本を日本人である我々がどこまで誇りをもって紹介できるか。日本人は自分や身内を低くして他人を持ち上げる傾向があり、またそれが美徳とされてきた節もあります。ついつい「日本はだめだ。あなたの国の方がよっぽどいいよ」といってしまったりする。相手からすれば私らは世界で一番金持ちで裕福な日本人。謙遜も過ぎれば嫌みになったりするのです。

今回はツアーの最初にダッカの博物館を訪問し、独立戦争の展示を見る機会がありました。また農村ではお話好きのステファンさんに毎晩つかまり、せっかくだから独立戦争の時のことを話してくれと頼んでみたらとても重いテーマなれど喜んで語ってくれました。疎開していたときのこと、下校途中にバングラの歌を歌っていたらパキスタン兵士に咎められて殴られたこと、川辺に横たわるレジスタンス兵士の死体を見て心を痛めたこと。プーバイルでもファルークさんから戦争前は毎年クリスマスを祝っていたこと、ネトロコナでの虐殺で友人を何人も亡くしたことなどを聞きました。彼らと接していて感じるのは、これらはみな自分たちの誇りであり是非伝えていきたいことなんだ、だからこそこの国をもっとよくしていくんだという信念のようなものでした。

前回は子供たちとの交流とバングラという国を見ることに精一杯でしたが、今回はこの国と人々が抱える歴史を感じてこようと臨んだツアーでした。少ない時間ではあったけれども話ができ、ヘモント劇場も満喫してコリマナカムサレナ♪と歌えてよかった２週間でした。

Q9．ベンガル語で「おいしい」は？

①モチャ　②モシャ　③モジャ

こんなに変わった！

井上儀子

バングラデシュに初等教育の必要性を感じ、ＡＣＥＦとＢＤＰの働きは始まりました。１９９０年のことです。女性は家に閉じこもり、女の子は勉強など必要ないと思われていた時代でした。１４歳になるともう結婚させられ、１２歳で嫁いでいく話もたくさん聞きました。婚期を少しでも遅らせるために、ＢＤＰ寺子屋小学校の先生には女性を採用し、その給料で高等学校に進むことが出来るようにしたのです。最初は村の一軒一軒を回り、子どもの教育の大切さを説き、学校に来るようにと、親を説得するのが、一番困難なことだったようです。女性が先生になることも、最初は戸惑い、村の人々に囲まれて子どもたちを教えている姿にがまんができず、夫がＢＤＰの事務所に怒鳴り込んできたこともあったそうです。

ところが、何年も続くうち、村の人々の考え方が変わってきました。両親も祖父母も一度も学校にいったことがないけれど、自分の子どもや孫が学校に行き、字の読み書きができるようになり、知らないことをたくさん覚えてくる。そこで、困ったことが起きたときに、何でも先生に相談するようになったというのです。家族が病気になったとき、食べるものが無くなってしまったとき、人にだまされたとき、・・・。村の中で先生は尊敬され、先生方もだんだん自信がついてきました。親戚以外の男性の前では顔を隠し、ものも言えなかった女性が、堂々と自分の意見を述べられるようになり、村の議員に推薦され当選した例もあります。

初等教育をと始めた活動ですが、その副産物として、バングラデシュの女性の地位を確実に高めていることを感じます。しかし、急に全部が変わるわけもなく、結婚して村が変われば、また状況も変わるでしょうし、嫁ぎ先で、夫や夫の両親が許してくれる確率は大変低いのです。やむなく先生を辞めていく人もたくさんいます。

そんな中、今回嬉しい話を聞きました。もう１０年も先生を続けているリナ先生はやっと（？）結婚が決まったのです。（バングラデシュでは遅いほうなのでしょう。）結婚しても先生を続けたいというのが彼女の夢でした。しかし、夫は許さなかったのです。少し離れた村に嫁いだので、歩いては通えませんが、リキシャに乗れば通える距離です。リナ先生は、先生を続けることができなくなり、ポロポロ涙をこぼし、毎日を過ごしました。それを見ていた舅が、「私がリキシャ代を払ってあげるから、先生を続けなさい。」と言ってくれたのです。夫の理解を得ても、舅、姑の反対を受けるのが普通なのですが、舅が賛成をしてくれたということに私は大変驚きました。バングラデシュはここまで変わったのか！と感動です。

ＢＤＰの活動が、地域に根ざしたものであり、村全体の発展のために力を注いでいることに畏敬の念を覚えます。

Q9 答え

③モジャ！！！ベンガル料理はなんでもモジャです。

スタディーツアーを終えて

東奥義塾　天野海走

「人間の寸法」という言葉を聞いたことがあります。誰が言ったのかは憶えていません。けれども今回のスタディーツアーで、この「人間の寸法」という言葉が思い起こされました。

バングラデシュでは、さまざまな事柄を見聞きし、いろいろな経験をしてきました。その多くは、今の日本では体験できないことです。日本とはまったく違う生活様式の中に身をおいて生活しました。わたしたちの生活がいかに多くのモノに囲まれているかを知りました。特に農村での生活は、大きな経験となりました。農村でのシンプルな生活は、不便さよりもむしろ心地よさを感じました。わたしたちが日本で必要だと感じているものの多くは、ほんとうは必要でないことを気づかされました。なかなか時間通りに、思うようにすすまない予定というのもよい経験だったと思います。いくつかの学校や家庭を訪問させていただきました。学校訪問では違う年齢の子供たちが肩を並べて、使い込んだ教科書を使って楽しんで勉強をしている姿を見ました。スラムの子供たちも農村の子供たちも決して裕福ではないのだろうけれども、元気に喜んで学校へ通っているようでした。訪問したわたしたちのほうが励まされて帰ってきたように感じます。職業訓練校の生徒たちも、ドロップアウトしても新たな目標を見つけて希望をもって学んでいるようでした。訪問した家庭では、それぞれの家庭に出来るおもてなしをしていただきました。ほんとうの「ご馳走（用意のために奔走する）」とはこのことを言うのではないでしょうか。バングラデシュの多くの人たちは「人間の寸法」からはみ出さない生活をしているように感じました。バングラデシュでは人間の生活の息吹を感じることが出来ました。そしてそれが人間にとって本来の生き方で、ほんとうに大切なことはそういう生活の中にすべて詰まっているように感じました。

今の日本では「普通」とか「当たり前」とか「人並み」と考えられていることが、実は人間の寸法からはみ出しているのではないかと感じます。自分たちでは使い切れないほどのものを持とうとする現実。「快適な」生活のために犠牲にしてきたものの多さ。それが人間の手ではどうしようもないところまで来ています。「当たり前」の基準から少しでも外れれば、あせってしまう。いつも何かに追い立てられているような感覚、いつも何かに縛られているような感覚があります。しかもその「何か」は、本当は必要でない、大切でないことが多いのではないでしょうか。日本では学びも労働もいろんなことが生活との関わりを失っているように感じます。わたしたちの生活のあらゆることが「人間の寸法」からはみ出してしまって、身の丈に合わないちぐはぐな洋服を着せられているように思います。

バングラデシュでわたしたちの生活を問い直されるときが与えられたことは、ほんとうに感謝です。このたびで思い起こされた「人間の寸法」ということを心に留めつつ歩んで生きたいと願っています。

Q10. バングラで使わないものは？

①スプーン　②トイレットペーパー　③帽子

「二週間を終えて」

岡本千恵

この二週間で計り知れないほどの体験をした。とても楽しいのに、時に流れはゆったりとしていた。感謝も一日で日本にいる時の何日分もした。笑顔なんて一年分くらいした気がする。歌もジョークも涙も…。人と気持ちを共有している時間が長かった。人を好きになるまでの時間が早かった。こんなに短い時間でこんなにも人を好きになれるのか、と思った。

午前中は大体学校訪問する事が多かった。私がまず感動したのは、先生方の教育している姿であった。年齢を聞けば私と同じくらいか、もっと若い人もいた。私は授業を見学しながら、「こんな先生に教えてもらいたい。こんな立派な先生がこの地にもいるんだ。」と思った。子供たちの未来の為に授業をしていて、この授業が未来へ繋がるんだ。と、感じさせるような空気があった。

子供たちはひっきりなしにやって来る。早朝から私達の名前を呼んで来る。窓を開けるとすぐ近くに顔があって、みんなにこにこしている。言葉は通じなくても歌を歌ったり、踊ったり、時間を共にしていると、みんなが掛替えの無い存在になった。

日本に帰る日が近付いていた夜、アルバートさんがベンチに腰掛けているのを見て、私は近付いて行った。最初は私の話に黙って耳を傾けていた。遠くを見るような目で突然口を開いた。「あなた達は朝起きて自分の好きな歯ブラシを使って自分の好きな歯磨き粉を使って歯を磨く。」うん、そうだと頷いた。「好きな朝食を食べて学校にもいけるし行きたい学校も選べる。でも、この国の人はそうではない。朝食は粗末なものでそれを食べたくなかったら朝食は抜きである。学校もどの学校に行くかなんて選択肢は無く、行くか行かないかの選択しか出来ない。」

アルバートさんの話を聞いて初めて遊びに来てくれる子供たちを少し違う角度で見れるようになった。遠くで呼んでる子供たちを見て心の中で、ごめんなさい、という気持ちが芽生えた。人々の目を見て、この地の人の事を考えるようになった。帰るのが惜しいと思った。今度は現地の人にも目を向けたい。第２９回の旅は終わったけれど、バングラデッシュについて知識を深めて、もう一度、違う視点で参加したい。

Q10 答え

②トイレットペーパー。バングラデシュでは「左手」で直接洗います。

もし勉強が嫌になったら・・・

北村表現

バングラデシュ。この国は、素晴らしい国です。日本とは環境が全くもって異なりますが、ツアーを終えて、もう少しバングラデシュにいたかった。帰るのがさみしいという気持ちでいっぱいでした。

バングラデシュの人たちは、自分たちの国を心の底から愛しています。それは、独立戦争によってたくさんの犠牲を出しながらも独立したからです。バングラデシュの人に私は聞いてみました。「自分の国好きですか？」「Ｙｅｓ！！」全員そろって即答でした。日本ではどーだろう。「日本好きですか？」「ん～・・・まー、好きかな。」となるのではないでしょうか。

バングラデシュに行って本当に一番思ったこと。というより感じたことは、子どもたちの笑顔です。なぜこんなにも貧困なのにこんなきれいなかわいらしい笑顔を見せるのか。貧困とは思えないような顔をしていました。私は、この国の人たちのあたたかさ、笑顔、そして貧困。これを見て本当に思いました。この国の役に立ちたい。この国で、役に立ちたい。

今私は大学で機械の勉強をしています。卒業したら機械系の仕事に就き、機械の勉強、そして知識を得て、バングラデシュに行って、役に立ちたいと決心しました。ですが、はっきり言って、自分の専攻している機械はそこまで好きではありません。ですので、勉強していても、本気で取り組めるのか。勉強が嫌になってしまうのではないか。そう思ってしまいました。このことを、アルバートさんに話しました。するとアルバートさんはこう言いました。「もし勉強が嫌になったら、この国のことを思い出せ。この国で、何人もの人が学校へ行きたくても行けないことを・・・。」すごく心にしみた。日本にいた時にこのことを聞いてもこんなには深く思わなかっただろう。でもここ、バングラデシュにいる中、このように言われた。すごい痛感した。アルバートさんの言った言葉がものすごく重く感じた。この言葉が帰ってきて、一番脳裏に焼きついている気がします。

普通に暮らしていれば一生関わらないかもしれない国にどれだけの人たちが関わっているだろう。日本にも、そんな人たちがいると思うとなんだか嬉しくなります。と、急に思ったので書きました。おわりー。

バングラデシュの子どもたち

高島　奈央香

バングラデシュに行き、書ききれないほどたくさんの大好きなものができました。それら全部がバングラ特有というのではありませんが、日本にいると気づかないこと、メンバーと出会えたから好きになったものがたくさんあります。バングラに行き、好きなものがたくさん増えたことがバングラと私の距離を縮めました。その中でも私が一番好きになったのはバングラデシュの子どもたちでした。

ダッカに滞在していたとき実はこの国を好きになれる気が全然しませんでした。クラクションがひっきりなしに鳴っていて、排気ガスでのどが痛かった。物乞いの人をみた。貧富の差を見た。街の中で笑顔というものをほとんど見なかった。私自身も色々なことを考えすぎて、笑顔が消えていたと思います。そんな私をまず変えてくれたのはスラム地区に住む子どもたちでした。話には聞いていたけど本当にキラキラした目で授業を一生懸命受けていました。なぜ悪環境に住んでいるこの子たちがこんなにいい顔をするのか、それは希望に満ち溢れているからだと思います。日本では考えても出てこなかった自分なりの答えがすんなりとでてきました。

ダッカから車で約６時間、私たちＡチームはベンガル人に「うわ～田舎っ！」と言われるような地、ネトロコナで一生忘れないだろうすばらしい６日間を過ごしました。ここの宿泊施設はとてもオープンな作りなので、子どもが遊びに来てたらすぐわかるし、「ナオ～」っていう遊びのお誘いもうるさいほど（笑）よく聞こえた。スタッフの方たちも私たちの安全をきづかいながらも地元の子どもたちと遊ぶことを優しい目で見守っていてくれていました。本当に感謝しています。ボートトリップに連れてってもらい、その船のおっちゃんとベンガルソングを熱唱したり、食堂のおばちゃんの息子と仲よくなってお家におじゃまさせてもらったり、大事なサリーを着さしてもらったり・・・本当にこの村の人は豊かだ。赤ちゃんは裸だし、傘の変わりにバナナのはっぱだけど、お兄ちゃん、お姉ちゃんは下の子を本当によく世話していた。いつも抱っこしてあげていて、写真を撮るときは自分より妹、弟を撮ってあげてという。傘のないメンバーにバナナの葉をちぎってあげていた。頭痛がしたり、咳がとまらなくてしんどいときもあったけど、子どもたちと遊んでいるといつのまにか元気になっている。そんな毎日でした。

プーバイルに移動し、最初は村の子どもたちと都会の子どもたちとのギャップにへこみ、村に帰りたいって思ったけど、こちらが仲良くしたいと心から思えば、その子のことをちゃんと分ろうとすれば時間はかかるかもしれないけど、村だろうがスラムだろうが都会だろうがそんなことは関係ないことが分った。

私はこのスタディーツアーで子どもたちとたくさん遊ぶことを目的にしていたので、それをはたすことができ満足だけど、それで終わらないで大好きな人たちのいるバングラデシュとこれからも関わっていきたいと思います。

スタディーツアーに参加して

東奥義塾高校３年　尾崎かなえ

私はバングラデシュに行く前、知ろう、学ぼうというよりも、楽しもうという気持ちのほうが正直大きかった。実際にバングラデシュにいってからもそういうところはあったと思う。２週間の間に知ったこと、学んだこと、それに対して思ったこと、感じたこと、考えたことはたくさんあった。歩道の片隅にいるケガをした物乞いの人やストリートチルドレンのこと、学校へ行くことができない子供、学校へ行ってもドロップアウトしてしまう子供たちのこと。実際に自分で見たり、現地で活動している方から直接話を聞いたりしたことは、テレビのニュースで見たり、新聞で見たりするよりもずっと心に響くものが合った。

私は今回バングラデシュへ行って学んだこと、感じたことをたくさんの人に伝えたいと思っている。それはバングラデシュのことをまったく知らない人、貧しい国ということしか知らない人など、バングラデシュについてほとんど知られていないからである。私の学校でも、バングラデシュの場所さえ知らない人がほとんどだ。そして、知ってほしいと同時に実際に行って、自分の目で見て、みんなにも何かを感じてほしいと思う。私はこれからもっとバングラデシュのことが広がって、学校からスタディーツアーに参加したいという人がもっと増えるようにできる限り伝えていきたいと思う。

最後に、ＢＤＰスタッフの皆さん、今回参加したメンバーの皆さん、迷惑をかけることもたくさんあったと思いますが、ありがとうございました。

(°∀°)☆バングラデシュで出会った笑顔☆(≧∀≦)

中村　恵子

美しい自然、優しい人々、そして一人一人の輝かしい笑顔…。そんなバングラデシュでのスタディーツアーは、私にとって一生忘れる事のできないものとなった。現在、バングラデシュは貧しい国のひとつと言われている。バングラデシュの国名をだしても良いイメージを持つ人は少ないはずだ。実際に、行く前の私のそうであった。頭の中に描いていたバングラデシュも決して明るいものではなかった。しかし、実際に行ってみると、私が描いていた暗いイメージが明るいものへとなった。それは、バングラデシュの人々の明るさ、そしていつも輝きに満ちていた笑顔のおかげであったと私は思う。

このツアーで私が特に感動したもの、それはバングラデシュの人々の笑顔であった。各寺小屋の小さな教室に入ると、今までに見たことのない、輝きに満ちた笑顔で、大きな声であいさつをしてくれた。授業でも、勉強に対する喜びが伝わってくるものであり、発言力も素晴らしく全員の声が教室一杯に響き渡っていた。私達と一緒に歌を歌う際にも、知らない歌にも関わらず、私達の口の動きを見ながら歌ってくれた。歌わない人は１人も居ず、全員が一生懸命歌ってくれている光景に私は感動し、ますますバングラデシュの子供達が好きになっていった。笑顔が素晴らしいのは子供達だけではなかった。ある日の学校訪問時に雨が降っていたので、人力車を交通手段とした日があった。バングラデシュの道は雨が降ると土がやわらかくなってしまい、歩くにも歩けない状態になってしまう。決して人力車でも楽には通れるわけではない。それに、人力車を引っ張る人は雨に打たれている。普通なら客に不機嫌な態度をとってしまうであろう。しかし、私達にそのような態度を決してとる事はなかった。おもわず心配する言葉を投げ掛けたとき、人力車の人が見せたのは笑顔であった。疲れていても、笑顔を私達に返してくれた時には、驚きの反面、その人の心の温かさも同時に伝わってくる、そんな笑顔であった。バングラデシュで出会った一人一人の笑顔は、私の宝物となった。

しかし、バングラデシュには飢えや渇きに苦しんでいる人達がいるのが現状である。そのような人達を見捨てて、このまま日本で便利な生活をしていて良いのであろうか。いや、そんな事はない。私達と共に手を繋ぎ、共に平和に生活すべきなのだと私は思う。バングラデシュの人々の笑顔や優しさは、私達日本人のものを遥かに超える素晴らしいものであった。

この旅に行くことを導いてくれたことに感謝しつつ、バングラデシュで得た事を心に留めながらこれからの日々を歩んでいきたい。良き二週間でした☆

“感謝”

福島倫子

日本に帰ってきて、バングラデシュのことを思い出すとまず最初に思うのが、“感謝”です。日本では当たり前のように蛇口をひねれば簡単に水が出て、スイッチを押せばガスが出て料理をすることができれば、お湯を簡単に沸かすこともでき、夜暗くなれば寝るまでずっと電気をつけ、不便なく生活できています。しかし、バングラデシュでは、水道も通ってなく、ガスももちろん無く、夜は停電になり、ロウソクの小さな光で生活するという、日本に比べたらとても不便な生活だったと思います。日本で快適な暮らしができていることに本当に感謝させられました。また、日本では朝・昼・晩と三食十分に食べ物を口にでき、嫌いな食べ物があれば残し、と、それが当たり前のようになっていました。しかし、バングラデシュに行って、食べることの大切さ、十分に食すことができるということに感謝する心、食べ物の大切さを日本にいるとき以上に思いました。帰国してから、食事をする度に、「この食べきれないほどの食事をバングラデシュの人たちにあげたら、どれだけの人がおなかいっぱいに満足して食事ができるのだろうか。」「今日何人の人が食事を十分にとれたのか。」と考えることがよくあります。けれど、それを考えたからといって今日本にいる自分には、バングラデシュのために今何ができるのかと思うと、答えは見つからず、どうしたらいいのだろうかと頭を抱えることもあります。今、バングラデシュから遠く離れた日本にいる自分は、小さな事でもいいからバングラデシュのために何ができるか探し、たくさんの事にチャレンジしたいと思います。また、それが私のこれからの課題でもあります。

最後に、ＢＤＰの皆さんには本当に、“感謝”の言葉しかありません。私たちが安心して、健康に２週間が過ごせたのもＢＤＰのスタッフのおかげだと思っています。ダッカの空港に到着した時から、バングラデシュから離れる日の最後の最後まで、ずっと私たちのそばにいてくれました。スタッフの方々は各家庭を持っているにも関わらず、２週間ずっと私たちのそばにいてくれたからこそ、こんなにもたくさんの、よい経験ができたのだと思います。ちょっと遠く離れた学校に行くにも車を出してくれ、学校に訪問した際も私たち日本人のこと、日本のことを子どもたちに詳しく、わかりやすく伝えてくれたときは本当に嬉しかったです。壺に溜めてある水がいつもいっぱいになっていて、私たちが十分に水が使えたのも、いつも重たい水を井戸から抱えて持ってきて、壺にいっぱいの水を入れてくれたスタッフがいたからだと思います。ＢＤＰのスタッフの方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私はこのスタディーツアーに参加して、初めて、世界にバングラデシュという国があることを知り、バングラデシュで日本とはかけ離れた生活をして、一生の宝となる貴重な体験をし、本当にバングラデシュが大好きになりました。「日本で自分ができることは何か。」を見つけ、それを実現することがこれからの私自身の課題です。

スタディーツアーのメンバーの方々、ＢＤＰのスタッフの方々本当にありがとうございました。

カティラの思い出

船　戸　良　隆

カティラを最初に訪れたのはいつ頃だったろうか。記録によれば９３年、第４回スタディーツアーとある。たしか、カティラのスタッフは、ダニエル君一人だった。カティラのスタッフは陽気な連中が多くて、今年などはそれが少し過ぎて、船から川に落とされる者が続出、ちょっと顔をしかめた。それにしても、カティラは、地理上からもなかなか多彩なプログラムが組めていいところだ。何度となく、スタッフとの別れを経験したが、今年は、これが最後かもしれないと思い、リーダーのシャゴール君の手を握り、別れの挨拶を言うとともに、主がこのプロジェクトを護ってくださるようにと祈ったときには、思わず涙が頬をつたって流れてきた。シャゴール君の目にも涙があふれていた。待遇もあまりよくないにもかかわらず、ここのスタッフは実によく、朗らかに働いてくれた。マラカール先生の故郷でもあるこの広い地で、BDP の活動が子どもたちの将来に、かけがいのないものとなってゆくようにと祈る他に、言葉はなかった。

カティラからの帰途、幹線道路の脇で、多くの人たちがジュートの作業をしているのが見られた。ここ数年、見られなかった風景なので、聞いてみると、政府がビニール製の袋を禁止したとか、それで、にわかにジュート生産が復活したとのこと。ビニール業界からの圧力もあったろうに、よくやったと感心した。バングラの美しい自然の中でのビニールの散乱にうんざりしていたことでもあり、自然保護から見てもすばらしい。

もうひとつ印象に残ったことは、さる世界的に大きな NGO が投げ出した地域の学校を、BDP が BDP の方式によって引き受け、運営していること。教育というものは、実に地味であり、しかも着実にしなければならないことを、今更の様に考えさせられた。BDP は、地元にしっかりと根付いたよい活動をしていることを誇りに思い、今後の発展を祈った。

再び原点に触れて

丹羽輝子

最初にスタディーツアーに参加してから13年が経ちました。あれから、バングラデシュの社会や教育の現場がどう変化しているか、懐かしい人たちとの再会があるのか等々、多くの思いが湧き上がります。今年、Ｂチームは久しぶりにカティラを訪問するとのこと。美しい田園風景と、そこに生活する心優しい村人たちとの生活は、熱い思い出となって心に湧き上がってきました。ダッカ空港の外へ出た時、一人の男性が飛んできて、私の荷物を取り上げました。そこにいたのはアンブロスさんです。思わず二人で手を取り合って再会を喜び合いました。メンバーの名簿の中に私の名前があったのを見つけた時から、今日の日が来るのを心待ちしていてくれたとのことでした。数年前、アルバートさんと来日の折、一晩、私の家にホームステイしてくださいました。そのようなこともあって、宿舎のＹＷＣＡに着くまで、喋り続けました。センターラインのなかった道も、今はきちんと分けられ、リキシャとベビータクシーとバス、乗用車でごった返していた道も、リキシャの通る道は区分けされ、短いけれども快適なハイウェイもでき、すっきりした道路事情を感じました。溢れる恵みと愛に満ちた生活が始まりました。ここに来ると確かに貧しさは感じますが、それを上回る豊かさに満たされます。私の心の中には、大きな負い目があります。日々神様によって支えられ、生かされている気持ち、思いは、バングラデシュに来るとさらに強くなって、私に迫ります。人生を振り返る年齢になった今、残された人生をどう生きるか、考えます。バングラデシュとの出会いと、そして今回思い切って参加できた喜びが再び沸いてきました。13年前、自分に何かできることがあるのではないかという思い上がった気持ちをもって参加したことが、昨日のことのように脳裏を横切ります。自分の今ある環境を土台にして考えてはいけないことを思い知らされた体験でした。この体験はそれからの自分の歩みを左右する意味深いものとなりました。車に揺られ船に乗って思い出深い診療所あとの宿舎に着いた時、笑顔を満面に浮かべて待っていてくれたスタッフや近所から集まってくれた人たち、それだけでもうすっかり癒されてしまい、心の開かされるのを感じ、ここでの生活を充分に味わいたい思いに駆られました。少しでも同じ立場に立って喜びや苦しみや悲しみが味わえる人に成長したい。マタイ１０の４０～４２のみことばが思い出されます。私たちは人が思いを寄せてくれていることを知るだけでも、それが共に生きる上で大きな励ましと、力になることを知らされてきました。それは私たちのどんな小さな働きでも一粒のからし種のようなもの（マタイ１３の３１～３２）とイエス様が語られたとおりです。私たちが生きていくうえで大切な事柄の原点の宝庫である。バングラデシュとの関わりを更に深め、強めて生きたいと強く感じる旅でした。

地域とともにあるBDPの寺子屋

菅野幸恵

今回ツアーに参加してもっとも興味深く感じたのは、BDPの活動が地域と密接に結びついているということである。BDPは学校のない地域でも地元の人々の協力がないと建てないという。土地を地元の人が提供し、BDPが建物を建て授業を行う。どちらかが一方的に主導権を握ってしまうのではなく、地域と共働することによってはじめてBDPの活動は成り立つ。

それに比べ日本の学校はどれくらい地域と結びついていると言えるだろうか。今まで研究者の端くれとしていくつかの地域に関わって感じるのは、都市部の学校、なかでも小学校や中学校は地域との関わりが薄いということである。最近は空き教室を地域に開放している学校もあるが、一方では子どもの関わる事件の増加とともに、学校を囲む塀はどんどん高くなり、訪問するときには名前を書いて、外来者というバッチをつけなければならない。調査などの依頼も難しく、関係者でない人が入るためには、たくさんの手続きを経なければならない。子育て支援活動が活発で、地域の機関の連携がとれている地域でも、学校だけがそのネットワークから外れていることもあった。

そこへいくと私たちが訪問した学校は開放的で、施設に関しては経済的なこともあるだろうが、学校と地域を隔てる高い塀などないし、外国人の訪問を知った地域の人々（老若男女）が続々と学校に集まり、授業中だというのに平気で教室を覗きにきて、中に入って来なければ先生たちもそのまま授業を続けている。同じことを日本の学校でしたら、即追い出されてしまうだろう。

バングラデシュの学校が開かれているのは、なによりもまず地域のネットワークがしっかりしていて、そこに学校が建つからであろう。子どもたちは学校に入る前から地域の人々に見守られて育っているのである。子どもも大人も誰と誰がきょうだいで親子なのか分からないくらい分け隔てなく接している。あるとき暗くなり始めてもまだ遊んでいる子どもに通りすがりの男性が怒って「早く家に帰れー」というようなことを言っていた。子どもたちは特に反抗するわけでもなく、「仕方ないなー」という感じでそれぞれ家に帰っていった。BDPの学校づくりはそのような地域の人間関係に包み込まれるような形で成り立っている。今の日本はその逆で、先に建物が建ちそこに人が入ってくる。当然地域のネットワークは乏しく、よその子が悪さをしていても見て見ぬ振りである。もう少し地域の人たちの目が子どもたちに行き届いたら、子どもたちの育ちの環境はよりよいものになるのではないかと思う。

共に力を出し合う、BDPと地域との関係、共に育ちあう地域の人間関係は、コミュニティがしっかり機能しているとは言い難い日本で暮らす私にさまざまなヒントを与えてくれた。バングラデシュで得たことを今後の生活や研究に生かしていきたいと思う。

「貧しさってなんだろう？」

長尾有起

今、日本国内外を問わず white band というものが注目を浴びている。これは世界の貧しい人々や国を思って身に着ける、文字通り白いブレスレットのことである。

私はこの夏そのwhite bandをして最貧国の一つといわれるバングラデシュを訪れた。White band を持っていくことにさして意図はなかったのだが、バングラデシュ滞在中に私の心の中を占めていた大きな問題の一つは、はたしてこの「貧しさ」についてであった。それは「最貧」の状況を目の当たりにして大きなショックを受けたから、ということではない。むしろ私はバングラデシュにおいてその「貧しさ」を感じることができなかったのだ。もしかしたらそれは私のセンサーが鈍かったせいなのかもしれない。しかしバングラデシュの人々は我々日本人が失ってしまったもの、そして今失おうとしているものをたくさん持っている、というのははっきりと感じられた。それは豊かな自然だったり、自国に対する熱い思いだったり本当に様々であった。

また客観的と思える経済面で考えても、お金を持っている・いないというのは相対的なものでしかなく、自分（つまり日本）と比べて「あいつらは貧しい」と決めつけることに大きな違和感を感じた。バングラデシュにはバングラデシュの生活の営みがあるのに、自分たちの生活と比べて「電子レンジも洗濯機もない。なんて可哀相なんだろう！」と言ってしまうのはあまりにも浅く短絡的過ぎる。

確かにこの日本に生まれ育った、という自分の恵まれている環境を感じ、そして貧しい人々のことを考え思うことは非常に大切なことだ。しかしその思われる「対象」となっている人たちは本当に貧しいのか、そしてそれを「哀れむべき」なのかどうかは疑問を挟む余地があるように思う。

「貧しさって何だろう？」この問いを先生や教科書から与えられた問題としてではなく、私自らの心の中から発することができた。このスタディーツアーに参加することで得たものは本当に数え切れないほどあるが、もしかしたらこれが一番大きな収穫かもしれない。

バングラデシュの豊かさ

小倉　沙央里

私がバングラデシュで一番衝撃を受け、そして大好きだったのが“バングラの豊かさ”だった。私は大学で貧困の削減や開発について勉強しているが、その中でバングラデシュは最も貧しい最貧国の一つである。確かに過密な人口を抱え経済的には貧しく、社会的なチャンスも少ない国だが、私が訪れた中で、人々の中に貧しさゆえの暗い部分を見ることはなかった。子供たちは笑顔をきらきらさせて、行く先々で私たちを温かく受け入れてくれた。そこで感じたことが、「豊かさ」は多面的であり、経済的に豊かであることだけが豊かではないということだった。バングラでは、人々の心が豊かだった。

その中で、バングラの自然の美しさも豊かさの一つだろうと思う。カティラという農村に行ったときは、本物のジャングルクルーズが目の前にあるようでとても感激した。その土地その土地それぞれの自然があり、またその自然に合った生活があるのが、当然のようでとても新鮮だった。

また、豊かだと感じた中でとても大きいのが、ＢＤＰの学校である。ダッカのスラムを訪問した際に、そのスラムの中に学校があり、スラムの子供たちが勉強していることに感銘を受けた。教育を受けることは、考える力や視野が広がり、その子供たち自身の将来の選択肢も広がるとともに将来国を支える人々を育てる上でもとても重要である。スラムという貧しい地域にも関わらず、そこで子供たちが学んでいることに大きな未来を感じた。また、教育は国の基盤なのだと実感し、ＢＤＰの活動を誇りに思った瞬間でもあった。

今回の滞在ではバングラのことを知ると同時に、日本が抱えている問題にも気づかされた。物質的には豊かだが、子供の自殺率はとても高い。また、先進国ではあっても教育に関してはまだまだ改善すべき点があると思う。興味深かったのは、教育や育児など様々な面で日本もバングラも同じような問題を抱えていることだ。大切なのは、バングラと日本が同じ目線に立って、ともに成長していくことではないのだろうか。

２週間という期間の間に、ここには書ききれなかったような多くのこと、特に心の豊かさがいかに大切かということを気づかせてもらえたことに、心から感謝したいと思う。バングラデシュと日本がこれからお互いに成長していくために、そしてバングラで私たちのことを温かく迎えてくれた人々に対して、自分には何ができるのかを考えていきたい。

「今考えること」

入野恵子

「世界中の、より多くの人が笑顔になったらいいな。」人の笑顔が大好きだから、いつからかそう思っていた。そして「笑顔でない人はどうして笑顔でないのだろう。」と考えたときに、私の中に「貧しい国の人々は、生活が苦しいから笑顔でいられない。」という思いつきがあった。しかし今回、貧しい国と言われるバングラデシュに行って、たくさんの人々、特に子どもが笑顔で過ごしている現実を見た。そしてむしろ、日本での私の生活はどうなのか…と不安になった。己が偏見を持ち勝手な勘違いしていることに気付いたとき、ショックだったが、きっと日本の多くの人がそのようなイメージを抱いているのではないだろうか。

このような差異がある中で、平和って実現されうるものなのか、とも思ってしまう。もちろん日本人にも平和を望んでいる人は多い。しかしそのことに違和感を抱くようになった。水道の水を出しっ放し、部屋の電気をつけっ放し、ただ何となくテレビを見ながら「平和って大事だね」と言う。その光景に何か違うものを感じるのだ。周りを分からない中でどうして平和を望めるのか。自分を振り返れば、当たり前のように、数えられないほど沢山の人の間で生きているのに、まるで人をわかって生きようとしていなかったということを痛感している。

バングラデシュに行って得たもの、それは人の間で生きる「人間」としてどう生きるかということである。感謝とは何か。力を合わせることとは何か。バングラデシュの人はそれらのことをごく自然にわかっていたように思う。しかし私はわかっていない。20年近く生きているのに！と思わず嘆いてしまったが、それは、人生の尺度は長さばかりでないという証拠ではないかと今は思う。

「ありがとう」と思う気持ちを噛みしめる、私はそのことをバングラデシュで初めて体験した。もちろん日常でも「ありがとう」は何回も使ってきたし、たくさんの人のお陰で私があると感じながら生きていた。しかし、ここでの体験はそれを超えていた。たった数日の間、お世話をしてくれたカティラのスタッフ。彼らと別れるその前日から、なぜか私は涙が止まらず、自分でもそのことに驚いていた。なぜなら、例えば中学や高校の卒業式、私は「寂しいな」とか「あの人には本当にお世話になったな」と思いながらも、涙一粒出てきたことがなかったからだ。つまり、辛い別れを経験したことがなかったのだ。しかしカティラで経験した別れは、言葉にならないくらい辛かった。なぜなら自分自身でも消化できないほどの感謝の気持ちでいっぱいになっていたからだ。スタッフとの別れ、カティラとの別れ。それは日本にいる人よりまた会える確率が少ないからではない。感動する感謝だったからだ。のぼせるくらいの感謝の気持ちを噛みしめ、涙が溢れたのではないか。そしてそれは、あなたが大切だからあなたを尊重し、感謝をするという過程にある自分の存在に気付くことができたから。人と人の間の本質的な交わりとは、このことであると思う。

バングラデシュで出会った皆が大切で尊い、だからこそツアーのみで終わらせたくない。そしてスタディーツアーは出発点であり、これから私は「人間」として生きていきたいと考えている。

最後にこのような道に歩ませてくださった方々に、心の底から感謝します。ありがとうございました。

人間らしくあること

戸松　優

バングラデシュから帰国してすぐ、忙しい日本での日々が始まった。豊かな物の中で時間に追われながら、バングラの地に住む人同様に生きる人がいた。私はこのスタディーツアーで多くのことを感じることができ、気付くことができた。

本やテレビで見るような物乞いやストリートチルドレンに出会った。ダッカ市内を車で移動して止まるたび窓から手を差し出された。街を歩いて感じる視線に恐さを感じる瞬間さえあり、バングラに滞在して暫らくの間は、船戸先生や儀子さんがなぜあんなにバングラに魅了されたのか、正直解らなかった。“キラキラした瞳”で黒板に向かう子ども、私の名前を呼び、慕ってくれる子ども、本当に温かいＢＤＰスタッフに出会った。私たちの見落とすような小さなところにも気を配ってくれる。ある時、「こんなに回りのことを見てもらって悪いな」罪悪感を感じて、シェアリングで“ギブアンドテイク”ということについて話し合うことが出来た。私の生きている１６・１７という年齢は、哲学的に自分についてや将来のこと、生きることを自然に考える時らしい。そういうことから、日々色々なことを感じている…とそんな思い違いをしていた。心を、心から遣うという行為をしていないことに気づいた。ＢＤＰスタッフ、現地の人が私たちに何かしてくれたことに対して「ありがとう、お返しをしたいな」と、そう考えた自分に衝撃を受けた。まずそこに存在した優しさに心から感謝すること、そのステップをいつも、日本にいるときでも飛ばしていたのだ。心を遣う行為が難しいということを身を持って感じた一件だった。

世界に生きるのは私だけではなく、中心は日本でもなく、多くの人が生きて自分の世界を動いている。だから存在しあう者同士、どうしても肩がぶつかってしまう。肩がぶつかったその瞬間に私には「ごめん」としか言いようがなく、そこで一々抱き合っていられたら平和なのかもしれないけれどそうもいかない。それでも、辛くて涙が出たとしても、私はバングラで偶然でも肩のぶつかってしまった人が沢山いたこと、その人に出会い、アジアを学べたこのスタディーツアーに感謝したい。私が今すぐにでも出来ることはこの経験を伝えることだと思う。残念ながらそういった作業に対して「何頑張ってんの?」と言う人間もいる。そういう人にすら、本当に温かい人の住むバングラデシュという国を知ってもらいたい。まだ少し整理のつかないことにスタディーツアー期間中テロが起きたという事実があるけれど。今回学んだことは今すぐ答えを導こうとするのでなく、小さいころ読んだ絵本の伝えることを今になって発見するみたいに、そういう長い目でスタディーを続けたい。

私が人間らしく、国を愛して生きる人に出会い、常に神様に感謝していられたということは、紛れもなく、神様と現地の人、そして一緒に日々を過ごしたメンバーのおかげだと思う。どうもありがとう。ドンノバット◎

彼らの笑顔がなつかしい

共愛学園高等学校１年　野坂郁佳

日本に帰ってきて思っていた以上に日本の生活にすんなり戻れてしまった。何の抵抗も無く箸を持って普通に食べていることにしばらく気付かなくて、本当にあの２週間が夢のようにぽっかり抜けてしまっているようだった。このまま夢のようにバングラデシュでの 2 週間を忘れてしまう気がする。でも今、写真を見る度、その時にワープしたように鮮明に彼らの笑顔とバングラデシュでの思い出が蘇ってくる。

学校訪問で、スラム街の子供たちに出会った。学校の門をくぐると子供たちが、手作りの日本とバングラデシュの国旗を持って待っていてくれたことに、本当に感激した。行く前は正直不安で一杯だったが、彼らの少し緊張したような笑顔の歓迎に安心した。貰った３本の旗はきっと一生の宝物になるだろう。初めてで緊張し、気持ちが空回りしていた。しかし、言葉も無く始めた折り紙を一生懸命折ってくれたり、ボロボロ♪をしてくれたりして、本当に嬉しくてその時初めてバングラデシュに来て良かったと思ったような気がする。授業を受ける彼らの顔は笑顔で満ち溢れていて、本で見たのと同じ笑顔だった。彼らの教室の熱気もまた、肌に伝わってきた。カティラの子供たちの笑顔も輝いていた。それ以上に輝けないくらいの真剣な眼差しで授業を受けていた。自分の日本での姿を思い出し、恥ずかしくなる思いだった。緑の自然一杯の中に浮かぶ彼らの笑顔は、緑を育てる太陽のように眩しく、絶えることがなかった。ココ太郎をしても様々な反応があり、子供たちの声を聞く度嬉しくなって、よくシーツの裏で笑っていたのを思い出す。子供たちは学校に通えることに本当に幸せを感じていて、悲しそうな顔をしている子など居なかった。勿論授業を嫌々受けている子も居なかった。

このスタディーツアーでは子供たちの笑顔を自分の目で見てくることも目的だったので本当に素晴らしい体験が出来たと思っている。子供たちが自分の姿を見直す機会を与えてくれ、また考えさせてくれた。辛くなった時は彼らの写真を眺めていつも元気をもらっている。自分の考え方も変わり、今まで受けていたバングラデシュの印象も大きく変わって、自分のやりたいことがだんだん明確になり始めた気がする。そして、この経験を生かし、これからも様々なことに挑戦していきたい。今まで自分とは全く繋がりがなかったバングラデシュと交流ができ、国際交流の第一歩を踏み出せたことは本当に素晴らしい経験ができたと思っている。また、大学生や先生たちとの話し合いが、自分自身の視野をもの凄く広げ、また様々な角度から物事を考えられるようにしてくれた。今回、精神的にも沢山のことを通して学ばせていただいた。これからバングラデシュでの経験や BDP の人たちの活躍を皆に知ってもらうため、自分が伝えられることは伝えていきたい。このスタディーツアーを企画して下さった先生方や BDP のスタッフの方、そして心配しながらも私の背中を強く押してくれた両親に心から感謝したい。ありがとうございました。２週間の生活を支えて下さった、BDP のスタッフの方の笑顔、子供たちの笑顔、そしてバングラデシュで笑いあった仲間の笑顔が本当になつかしい。

壁を壊し、人間を作る

共愛学園高校２年　工藤千明

幼い頃、私はカレーライスが大好きだった。そんな私を父は近所のベンガル料理の専門店に連れて行ってくれたことがある。今はもう営業していないが、未だに看板や雰囲気が残されたままで、その店の前を通るたびに懐かしい気持ちにさせてくれる。当時の私は、父がおいしそうに食べるカレーライスを横目で見るだけで、食すことはできなかった。大好きなはずのカレーライスを食べず、ただ泣いていたのだ。あれから１２年の年月が流れ、今私はバングラデシュの地で、ベンガル人の方々と同じものを食べ、文化に触れている。何の抵抗もなく食べ物を口にする自分はどこから生まれたのだろうか。

幼い頃の自分が食せなかった理由、それは心の中にわだかまりが存在したからだと思う。「外国人」が作った料理という意識の強さ、この経験が私の中で初めて存在した。「壁」であった。その壁は海外経験を積むことによって超えることができたのだが、私はバングラデシュで新たな壁に直面した。

バングラデシュは貧しい、よくこのことを耳にする。バングラデシュに着いた当初、街の光景を見るや否や、私は恐怖心を覚えた。バングラデシュを外見だけで判断していたからかも知れない。それでも現地の人々と関わる中で、内面を知るうちに、私の心の中からいつしか恐怖心が消えていた。ＢＤＰのスタッフ、現地の学校の子どもたち、街の人々・・・多くの人と出会い、多くの人のやさしさを感じた。そして「心の豊かさ」を知ったのだ。そして「バングラデシュの何を思い、貧しいと思うのだろうか？」という疑問が、私の頭の中をよぎっていた。

バングラデシュに向かう前、私は「現地の人々のために何かをしたい」と思っていた。しかし、実際に私にできることはなかった。逆に、バングラデシュの人々が私自身を変える機会を与えてくれたのだ。

学校訪問のとき、授業を受ける子どもたちの活き活きとした姿に感動した。目をきらきらと輝かせ、楽しそうな様子が伺えたからである。日本の子どもたちはこんなにも授業を楽しんでいるのだろうかと思わず疑ってしまうほど、とても魅力的であった。その中で、子どもたちが絵を描く時間に、私は驚いたことがある。それはどの子どもたちも国旗の絵を描いたことだ。何故こんなにも愛国心が強いのか、私には考えられなかった。その理由にはバングラデシュが独立するまでの歴史的背景があったことを知った。

また、私は子どもたちと交流するために日本からお土産をたくさん用意して来た。その中のひとつであるお手玉を多くの子どもたちの前で遊び方を見せようと宙に投げた瞬間、男の子がお手玉を横取りして逃げてしまったのだ。そしてそれが原因となり、お手玉の取り合いで騒動を招いてしまったのだ。私は、物質的な関係を持つことがコミュニケーションの手段の一つだと思っていた。言葉がなかなか通じないとなると、なおさらその選択肢を選ばざるを得なかった。それでも次の日、物を用いずにコミュニケーションが取れたとき、私はこの上ない楽しさを抱いた。「壁」を壊したのである。

「バングラデシュの何を思い、貧しいと思うのだろうか？」、バングラデシュの人々は心が豊か、だから私はバングラデシュを貧しいと思わない。これは私が滞在期間

の中で感じたこと。それでも、私には今も忘れられないことがある。滞在期間も残りわずかとなった頃、私は大学訪問時に同世代の女の子たちと話で盛り上がっていた。その時、突然男の子が割り込んで片言英語で私にこう言ったのだ。「お前の国は豊か。でも俺たちの国は貧しい。」と・・・。私はこの言葉にショックを受けた。その時、私はとっさに「違う！」と言ってしまったのだが、そう答えた自分に今反省している。私はバングラデシュの人々のやさしさを感じながら過ごしてきた。その「心の豊かさ」は、決して世間で言う「豊かさ」とはいえないことに気がついた。現実に目を向けてみると、経済的な格差の問題が響く。その現実を逃避するかのような私の発言は、本当なら慎むべきだったのだ。それでも私の心の中には、「貧しさ」を受け止めることを拒む自分がいた。

そんな時、私はふと気がついた。それはアルバートさんの言葉。「世界には発展している国と、発展途上国が存在する。その中で互いに依存しながら生きている。そして、そのことこそが『人間』を作る」、確かにバングラデシュが豊かになるまでは、現段階では厳しい。それでもそのような国を「知る」ことで、互いを尊重し合う社会を作ることができる。その社会作りが私たちの役目。バングラデシュのことを多くの人に知ってもらいたい、そして人々の心の中に存在するわだかまり、「壁」を壊したい。かつて私の心の中に存在した壁が壊れたように、その壁を壊すきっかけを私に与えてくれたバングラデシュの人々に恩返しがしたいのだ。

「壁」を壊し、「人間」を作る。その役目を果たすために、そしてこのスタディーツアーを通して出会った人々に感謝し、私は生きていきたい。

第29回ACEFスタディーツアー参加者（2005夏）

	氏名	ふりがな	住所	教会	備考
A－team（Netorokona）					
1	山口　旬	ﾔﾏｸﾞﾁ ｼﾞｭﾝ	神奈川県横浜市金沢区谷津町	霊南坂教会	横須賀学院小学校教諭
2	井上　儀子	ｲﾉｳｴ ﾉﾘｺ	埼玉県さいたま市北区奈良町	浦和東教会	ACEF事務局
3	天野　海走	ｱﾏﾉ ｶｲｿｳ	青森県弘前市小比内	弘前教会	東奥義塾高校　宗教主事
4	岡本　千恵	ｵｶﾓﾄ ﾁｴ	東京都渋谷区猿楽町		青山女子短大2年　英文
5	北村　表現	ｷﾀﾑﾗ ﾋｮｳｹﾞﾝ	東京都昭島市美堀町	昭島教会	拓殖大学 機械ｼｽﾃﾑ工学
6	高島　奈央香	ﾀｶｼﾏ ﾅｵｶ	兵庫県神戸市西区秋葉台		聖和大学2年　幼児教育
7	尾崎　かなえ	ｵｻﾞｷ ｶﾅｴ	青森県弘前市大字自由が丘		東奥義塾高校3年
8	中村　恵子	ﾅｶﾑﾗ ｹｲｺ	山梨県甲斐市万才		山梨英和高校2年
9	福島　倫子	ﾌｸｼﾏ ﾄﾓｺ	群馬県群馬郡群馬町井出		共愛学園高校1年
B－team（Kathira）					
1	船戸　良隆	ﾌﾅﾄ ﾖｼﾀｶ	埼玉県所沢市松が丘	教団教師	ACEF事務局長　牧師
2	丹羽　輝子	ﾆﾜ ﾃﾙｺ	那須郡那須町大字高久乙字遅山	西那須野教会	元東洋英和幼稚園園長
3	Carol Braaksma	ｷｬﾛﾙ ﾌﾞﾗｸｽﾏ	群馬県前橋市駒形町	伊勢崎教会	共愛学園高校教諭
4	菅野　幸恵	ｽｶﾞﾉ ﾕｷｴ	神奈川県川崎市多摩区菅仙谷		青山女子短大専任講師
5	長尾　有起	ﾅｶﾞｵ ﾕｷ	東京都三鷹市大沢	小川教会	ICU2年　人文科学
6	小倉　沙央里	ｵｸﾞﾗ ｻｵﾘ	東京都世田谷区代田	代田教会	学習院大学2年 政治学
7	入野　恵子	ｲﾘﾉ ｹｲｺ	東京都練馬区貫井		東京女子大2年　国際関係論
8	戸松　優	ﾄﾏﾂ ﾕｳ	山梨県北巨摩郡須玉町藤田	韮崎教会	山梨英和高校2年
9	工藤　千明	ｸﾄﾞｳ ﾁｱｷ	埼玉県本庄市本庄	高崎教会	共愛学園高校2年
10	野坂　郁佳	ﾉｻｶ ﾌﾐｶ	群馬県前橋市鶴が谷町		共愛学園高校1年

バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF

会員募集

個人会員	年額1口	5,000円
団体会員	年額1口	50,000円
学生会員	年額1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替　00100-0-185540
アジアキリスト教教育基金

〒169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL. & FAX. 03-3208-1925
E-mail:acef@rg7.so-net.ne.jp
http://www.bluerain.fm/acef